

氏 名	庄 司 凡
授 与 し た 学 位	博 士
専 攻 分 野 の 名 称	医 学
学 位 授 与 番 号	博乙第 4434 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 26 年 12 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学 位 論 文 題 目	Laparoscopic findings of reddish markings predict hepatocellular carcinoma in patients with hepatitis B virus-related liver disease (腹腔鏡所見「赤色紋理」はB型肝炎ウイルス関連肝疾患患者で肝細胞癌を予測する)
論 文 審 査 委 員	教授 山田 雅夫 教授 樋之津 史郎 準教授 白川 靖博

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

目的：B型肝炎ウイルス（HBV）慢性感染患者の多くは高HBV-DNA量でアミノトランスフェラーゼ（ALT）高値なので、HCCの発生を防止するためにはそれ以外に肝細胞癌（HCC）を予測する因子が必要とされる。本研究の目的は肝発がん予測因子を明らかにすることである。

方法：本研究では肝疾患評価のため腹腔鏡検査を受けた HBe 抗原陽性の 303 症例についてコホート研究を行った。肝発がんに関連して腹腔鏡的、肝組織学的および臨床的特徴を調べた。

結果：平均 8 年のフォローアップ中に 27 人の患者（37～72 歳）で肝がんを認めた。肝硬変、組織学的肝炎活動性、赤色紋理および高年齢が肝発がんに有意に関連していた。多変量解析では高年齢と性別男性が肝発がんと有意な関連を認めた ($P=0.002$, $P=0.043$)。30 歳以上の症例では肝炎早期の患者でも 30 歳未満症例より有意に肝発がんを認めた ($P=0.031$)。多小葉性破壊を示す腹腔鏡所見である高度赤色紋理は 30 歳以上で診断された症例で肝発がんと有意な関連を認めたが（オッズ比=1.67, $P=0.034$ ）、肝炎活動性と ALT 値は有意な関連を認めなかった ($P=0.075$, $P=0.69$)。

結論：肝発がんは高年齢、性別男性、肝硬変と関連があった。肝炎活動性や ALT 値より赤色紋理は年齢 30 歳以上の B 型慢性肝炎患者の肝発がんを予測するのに有用である。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、B 型肝炎ウイルス慢性肝炎患者において、腹腔鏡所見が肝がん予測因子となりうるかを検討したものである。本研究では、肝疾患評価のため、腹腔鏡検査を受けた HBe 抗原陽性の 303 例について、コホート研究を行った。肝発がんに関連して、腹腔鏡的、肝組織学的および臨床的特徴を調べた。その結果、平均 8 年のフォローアップ中に 27 人の患者で肝がんを認めた。肝発がんは、高年齢、性別男性、肝硬変と有意な関連があった。さらに、多小葉性破壊を示す腹腔鏡所見である高度赤色紋理は、30 歳以上で B 型肝炎ウイルス慢性肝炎と診断された症例で、肝発がんと有意な関連を認めた。これらの成績は、腹腔鏡所見「赤色紋理」は、B 型肝炎ウイルス関連肝疾患患者で、肝細胞癌を予測するという重要な知見を明らかにしたもので、価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。